

化学教育 徒然草

第二のマリー・キュリーをめざせ

TAKANO Keiko

鷹野景子

お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系 教授



巻頭言

「グローバルリーダーの育成」という言葉があちこちから聞こえてくる時代になった。その先駆的プロジェクトといえるだろうか。約10年前、日本学術振興会（JSPS）による学生海外派遣事業の公募があった。私は、お茶の水女子大学の実施責任者として、(1) 大学院博士前期課程学生に半年間の授業を受けさせること、(2) 博士後期課程学生に半年から1年の研究留学経験を積ませること、の2つを柱とする欧州の大学への派遣計画を申請し採択された。東京女子高等師範学校（本学の前身）卒業後に国際的に活躍した女性物理学者、湯浅年子博士（1909-1980）¹⁾の欧州での活躍を念頭に、事業名を「校風をつなぐ女性科学者の育成—第二のマリー・キュリーをめざせ—」とした。JSPSからの5年間の支援の後、日本学生支援機構（JASSO）の支援を得て継続し、平成29年度に10年目を迎える。

なぜ、私はこの事業申請の責任者を買って出たのか。私が31歳で学位（理学博士）を取得した当時、学位を取得したら海外留学するのが理系研究者の標準的（つまり、“ごく普通の”）キャリアであった。“普通のことをしたい”と願った私は、幸運にも35歳の時に文部省（当時）の在外研究員制度により、10カ月の米国留学の機会を得た。この経験は、研究の進展に加えて、その後のキャリアに大きな恩恵をもたらした。留学経験が条件の各種委員や役職など多様な機会を得たこと、留学時に知己を得た研究者に国際交流ネットワーク構築において助けもらったことなどである。一方、当時の多くの女性研究者にとって、留学の実現は困難であった。特に、子育て中の留学は、職場および家族の理解と協力がなければ実現しない。この経験から私は、後輩たち、つまり女子学生たちに、学生時代にぜひ留学をしてほしいと考えるに至ったのである。20代後半以降は結婚・出産などを理由に留学が困難になる。しかし20代前半の海外留学なら十分実現可能であり、同時に、学びの効果も高いであろうと考えたのであった。

第二のマリー・キュリーは育ったか。その答えはまだ出ていないが、この支援により留学を経験した修士号取得者がグローバルな視点をもつ企業に歓迎されて活躍し、同じく支援を受けた博士号取得者が若手女性研究者として国内外で研鑽を積み続けていることは確かである。

1) お茶の水女子大学デジタルアーカイブス ～先駆的女性研究者データベース～ 女性研究者名鑑
湯浅年子 http://archives.cf.ocha.ac.jp/researcher/yuasa_toshiko.html (2017年6月現在)

[連絡先]

112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 (勤務先)